

論文作成ガイドブック

はじめに

大学でもっとも重要なのは論文・レポート（以下、論文）を作成するということである。論文をきちんと書く能力を身につけずに社会に出ることは、大学卒の肩書きはあってもその能力に欠けているということを示すものに他ならない。というのも、論文を執筆するという作業は、自らの思考を論理的に構築し、それを他者（読者）に伝達する「プレゼンテーション能力」「コミュニケーション能力」そのものであり、多少、口先がうまいという程度ではなく、きちんとしたリサーチと分析・理解を踏まえた、論理的な思考の構築の過程を表現することが求められるからである。

とはいえ、論文の書き方をきちんと学ぶ機会は必ずしも十分に与えられているわけではなく、初めて自らリサーチし、論文を作成するという人も多いであろう。これまでのゼミでの指導を通じて得られた教訓や体験を踏まえ、学生が陥りやすいわなやミスなどを想定しつつ、論文作成にいたるまでのプロセスと論文を实际書くにあたっての注意をここにまとめておく。

このガイドブックは鈴木を担当する講義やゼミなどで紹介するものであるため、その方法・スタイルは政治学（国際政治学）のものである。テーマやディシプリンによって調査・研究・論文作成の方法は多少なりとも違うので、その点を注意して欲しい。また、これは論文作成のための「完全ガイド」ではない。あくまでも論文を作成するまでのプロセスの中で注意すべき点を列挙しているにとどまり、ここに書かれている通りにやっても必ずしも良い論文が出来るわけではない。論文の書き方を最初から学びたいという人は浜田麻里・平尾得子・由井紀久子著『論文ワークブック』（くろしお出版）などを参考にすると良いだろう。

テーマ設定・問題設定

どのようなテーマで論文を書くか、何について書くか、ということを決めることから論文作成の作業は始まる。テーマを選定する上で重要なポイントは：

- 明確な分析・調査対象があること（例えば「アメリカ外交」だけでは漠然としすぎている。アメリカ外交の『何（what）』を分析しようとしているのかを明確にする。例えば『アメリカの環境問題をめぐる外交』）
- どのような範囲を対象とするのか（例えば「アメリカの環境問題をめぐる外交」のなかでも『いつ（when）』の時代の問題を扱おうとしているのか。例えば『クリントン政権の環境問題をめぐる外交』）。
- 『なぜ（why）』このテーマを選んだのか、が明確になるような問題設定が必要。ただ単に「おもしろそうだから」「興味があるから」というのでは論文として成立しにくい。

自分がこの論文を通じて何を明らかにしようとしているのか、この問題を分析すればどのようなことがわかるのか、何のためにこの論文を書くのか、といったことをきちんと説明できるようでなければならない（例えば「クリントン政権の環境問題をめぐる外交」を分析することで、京都議定書をはじめとする国際的な規範形成のプロセスにおいて、世界最大の資源消費国であるアメリカがどのように取り組んだのかを見ることで、今後の世界レベルでの環境保全レジームが機能するかどうかを明らかにする。そのために環境問題に積極的といわれたクリントン政権時代の環境外交を取り上げる）。

- **問題設定が明らかになれば、次は『どのように (how)』この問題に取り組むか、**ということを明らかにする。上記の問題意識を明らかにするために、どのような理論的な枠組みを用いるのか、どのような分析枠組み（アプローチ）が適切かといったことを判断しなければならない（例えば「クリントン政権の環境問題をめぐる外交」を分析する枠組みとして、国際レジーム論からのアプローチ、クリントン政権内の政策決定過程の分析アプローチ、アメリカ政府の発言を言説分析するアプローチ、国際交渉過程の分析アプローチ、などなど）。
- **予断を排してテーマを選定すること。**例えば「アメリカは超大国であるから他国はアメリカに追従するに違いない」「フランスはドゴール以来の独自外交路線をとっているから、きっと反対し続けるに違いない」などといった『思い込み（予断）』をもってテーマを決定すると、明らかに偏向した論文になる可能性が高い。常に自分の意見を批判的に検討し、「思い込み」が入っていないか、即ち、その命題は立証可能か、ということを検証しながら思考を展開すること。これはテーマ選定に限らず、論文作成の作業において極めて重要な点である。
- 同様に、**アприオリに善悪の評価（価値判断）を下さないこと。**例えば「派閥は悪いことだからなくさなければならない」「国益を守ることは世界平和を妨げるから良くない」といった『価値観』を前提にテーマを考えていると、バランスを欠いた議論となり、論文というよりは演説・宣言・ステートメントになってしまいがちである。論文を書く意義は、できるだけ価値観を排除し、客観的なデータや資料を使って、自らの思考を「論理的」に展開し、説得力のある説明を構築することである。自分の価値観から自由になることはありえないが、自分の価値観を充分認識しながら、客観性を維持する努力を怠るなかれ。
- **何を書くか、という問題以上に、何を書かないか、という意識をもつべし。**なぜこの記述が必要なのか、どうしてこの事実を説明しなければならないのか、など、常に自分の書いている文章に論理的な存在意義を与えること。それは同時に議論に必要ではない事実や記述を含まないということでもある（しばしばレポートや論文では「歴史的背景」や「時代状況」といった、本論とは直接関係ない記述や解説がダラダラ続くものがある。これは明らかに字数稼ぎでしかなく、無駄である）。

- さらに重要な問題として、自分が使う資料や文献も何らかの価値判断の下に事実と記述を選択的に使っているということを理解することが大事である。論文を書くためには他者の集めた情報や資料、記述を用いることは不可欠であるが、そこに書いてあるのは、その著者の判断によって記載されたものであり、客観的な真実ではない。したがって、自分の論文を執筆するに当たって、他者の書いたものをそのまま写すことは断じて許されない。必要に応じて引用する、紹介することは可能であるが、それはあくまでも自分の議論のコンテキストに合わせて用いるものであり、その逆であってはならない。そのためにも幅広いリサーチを行い、一つの文献に頼るのではなく、一次資料を読み込み、複数の文献を用い、その中で自分の考え、議論をまとめ、自らの議論を整理したうえで、それらの文献を使っていくことが求められる。
- 論文は明確な問題意識と問題設定、そしてそれに対するアプローチを伴わなければ、ただの作文にしかならない。論文は単に面白そうなことを調べて、どこかに書いてあることを書き写すだけではない。また調べた事実を羅列するだけでもない。重要なポイントは、自分の問題関心や自分の考えを論文の上に表現することである。

論文作成の作業は芸術的な創作活動だと心得るべし

バックグラウンドリーディングについて

リサーチ（調査研究）を始める前に、テーマやアプローチに関する全体像や先行研究を把握するためにバックグラウンドリーディングが必要。いきなり自分のテーマに関する文献だけを読んでも、議論としての広がり生まれず、問題設定に対応した答えを導き出すことは難しい。バックグラウンドリーディングについてのポイントは以下の通り：

- テーマに関する文献を幅広く収集し、大雑把でよいので、すべてに一通り目を通すこと（バックグラウンドリーディング）。上記のサンプルでいえば、「アメリカ外交」「環境問題」といったキーワードや、分析アプローチに関するもの「政策決定過程」や「国際レジーム」といったキーワードを含む文献を広く読んでおく（「クリントン政権の環境問題に関する外交」といったキーワードで検索してもほとんどヒットしない。すでにどこかで本や論文に書かれたテーマは、既存の研究に反証する材料が無い限り、研究に値しない）。
- バックグラウンドリーディングは、あくまでも対象の周辺領域を理解するために行なうものであり、これを論文に反映させるべきではない。リサーチと論文執筆は別のものであり、リサーチしたことをすべて論文に書くのは最悪のケース。通常、論文の内容の10倍以上のバックグラウンドリーディングが必要だと考えておくべし。
- ただし、バックグラウンドリーディングの中で、自分のテーマに関する部分や重要と思われる事項、記述、分析などは常にメモをとっておくこと。立論に必要な資料の多くはこうしたところから得ることになることが多い。

- リーディングマテリアルの中でももっとも自分のテーマに近いものは、丁寧に読むこと。特に脚注や参考文献で参照されているものにもリーディングを展開していく必要あり。
- 繰り返しになるが、バックグラウンドリーディングはあくまでもテーマやアプローチの全体像をつかむために行うものであり、論文執筆のための準備に過ぎない。ここでは全体像をつかむことを意識し、論文の全体像を考えながら読むべし。

前提 (assumption) について

前提とは理論的に引き出される、ある種の決まりごとである。数学で言えば「公理」に当たる。しかしながら社会科学に「公理」はない。社会科学における前提（公理）をいかに導き出すのか、ということを考えるに当たって、理論的な研究や先人の研究業績（先行研究）を利用する。

前提となるものは、いわば『当たり前』として受け入れるものである。例えば、「人間は合理的に行動する」というのは、当たり前のことといえるが、しかしながら「合理性の基準となるものは何か」となると、この前提が崩れていく（例えば、「人間は合理的に行動するから、自分が一番儲かるように行動する」という前提を立てたとしても、「お金を設けるよりも人助けをすることの方が価値が高い」と考える人だったら、本当に自分の儲けを最優先するだろうか？「自爆テロ」などは「合理性」から説明できるのだろうか？）。**前提とは即ち、自らが持っている「人間観」であり「世界観」なのである。**このような「人間観」や「世界観」は自分の生きてきた人生の中での経験や知識によって形成されるが、様々な理論研究や先行研究を通して、自らの価値観を反省的（reflective）に見直し、対象を分析するために必要な「前提」を得ることが求められる。

国際関係の理論でいえば、「古典的リアリズム」は、国家という単位を「単一の」ユニットとして捉えることを「前提」とし、そのユニットは自らの利益を内在し、その利益を最大化するために行動する、ということをして「前提」としている。「ネオリアリズム」は、同じユニットの前提を持ちながら、各国の利益は単に内在的なものだけではなく、システムによって規定されることを前提としている。他方、「理想主義」と呼ばれるグループは、ユニットを世界市民社会や国際社会におき、そこにおける平和的・民主的な価値を最大化することを「前提」としている。「ネオリベラル」といわれる人たちは、国家をユニットとしつつも、多国籍企業などのアクターも含めた存在を分析対象とし、個々のアクターの合理的な計算によって世界の動きを把握しようとしている。このように、議論の基礎となる理論的な研究には、それぞれ固有の「世界観」があり、どの世界観によって立つのが最も対象を分析するのにふさわしいのか、ということを考え、前提を設定することが論文に求められるのである。ただ、注意しておくべきことは：

- 理論が全ての世界観を網羅しているわけではないこと。即ち、自らが対象とする事象を分析にするに当たり、自分なりに前提を組みなおす必要があるということ。

- 「前提」は自分の世界観や価値観によって影響されるが、それは自分の「思い込み」とは**決定的に異なる**ということ。「前提」はあくまでも自分が対象とする事象を最もよく分析することができるものでなくてはならない（例えば、アメリカの対イラク戦争を分析するに当たって、いかに自分が平和を愛し、平和な世界を願っていても、「国家は平和的な解決を希求する」という前提に立って分析することは、事象を理解することとは正反対の前提になってしまう）。
- 自分が暗黙のうちに作ってしまっている「前提」を**意識的に理解しておくこと**。例えば「アメリカがイラクを攻撃するのは石油の利権を得るためである」という議論を進める際に、暗黙のうちに「国家は単一のユニットである」「国家は自らの利益を最大化する」「そのためにはいかなる手段もとりうる」という前提が暗黙のうちに含まれている。しかしながら、本当にそうなのだろうか、ということを常に問いかけるべきである。国家は本当に単一なのだろうか？国家は本当にいかなる手段でもとることが可能なのだろうか？アメリカの利権とは具体的にどういうことであろうか？などなど、様々な問いかけができるであろう。そうした問いかけに耐えられるよう、自分が暗黙のうちに作ってしまっている「前提」を意識する必要がある。
- 先行研究から学ぶ際も、そこに現れる「前提」が何なのかを理解しながら学んでいくこと。他の本に書いてあることは、全て「正しい」ことではない。ある種の前提に立ち、その前提に沿って議論を進めることで、「説得力のある」議論ではあるかもしれない。しかしながら、別の前提に立ち、別の角度から見ると、より説得力のある議論を展開することができるかもしれない。自分がよって立つ前提は何か、その本の筆者がよって立つ前提は何か。こうしたことを区別して資料を読むことができれば、新たな分析視角や新たな結論を生み出す可能性が広がっていく。

仮説 (hypothesis) について

仮説とは**理論的な前提に基づき、「問題設定」のところで提起した課題を解くための「解法」を示すものである**。以前使ったサンプルを例にして言うと、「クリントン政権の環境問題に関する外交政策」というテーマに取り組むために、「国際レジーム論」を用いて分析する、ということになれば（国際レジーム論が持つ、様々な理論的前提を意識した上で）次のような仮説をたてることが出来る。

「クリントン政権は国際的に生成しつつある環境レジームによって、環境問題に対する認識を変化させたため、京都議定書に調印するという決断をした」

このように、仮説は問題設定の選択、理論的なアプローチの選択をしていくと、おのずから決まっていく。問題設定のところでも述べたように、このような理論的アプローチの可能性を念頭においてテーマ選択することも可能である。

また、仮説は一つに限るというわけではない。いくつかのアプローチを用いて、複数の

仮説をたて、最終的な結論を導き出すというやり方もある。この場合、仮説を何段階かにわけて、徐々に絞り込んでいくという設定の仕方になる。ただし、複数のアプローチ・仮説を用いて対象を分析するのは、往々にして議論自体が矛盾を起し、最終的に結論までたどり着かなくなってしまうケースがある。

例えば、「クリントン政権は国際レジームからの影響とともに、国内における環境政策を支援するゴア副大統領の存在があったために、京都議定書に調印した」という仮説は成立可能だが、「国際レジームからの圧力による認識変化」ということと、「ゴア副大統領は最初から環境保護を推進していた」という設定とが矛盾する可能性がある。なので、この場合は「クリントン政権において、国際レジームからの影響が強まった結果、環境推進派のゴア副大統領の意見が重視されるようになり、その帰結として京都議定書に調印した」という仮説にならなければならない。最初の例と異なるのは「国際レジームの影響」と「ゴア副大統領の意見」との間に因果関係が成立しているということである。

論文を作成するにあたって、常に因果関係の展開に注意しなければならない。「京都議定書の調印」という一つの結果を説明するにあたって、どのような原因が働きかけたのか、どのような結果が生まれたのか、という因果関係を証明することこそが論文の命になる。仮説を立てる際には、こうした因果関係の流れ（chain）をきちんと明確しておくこと。

演繹法と帰納法について

論文を作成するには、基本的に二つの方法がある。それが演繹法と帰納法（deduction, induction）である。演繹法とは、ある種の理論的な前提を基礎とし、その理論を踏まえて仮説をたて、その仮説を元に現実を分析していく手法である。経済学の研究などは基本的にこの手法をとる。他方、帰納法とは、現実をまとめあげ、抽象化していくことで、理論的な問題に近づこうとする手法である。ここでも一定の前提と仮説は必要になるが、あくまでもそれは現実を分析することを主眼に置いた前提と仮説であり、理論的に導き出されたものではない。

一般に学生が論文を書く場合、帰納法によるものが多い。現実に関心を持ち、最終的に具体的な政策提言や結論を出そうとする場合、帰納法の方が親しみやすいからである。この『論文作成ガイドブック』でも、帰納法的方法論をベースにしている。しかしながら、帰納法を用いる場合、多くの場合がこうした方法論的な問題を無視して議論を進めがちであり、その方法論的な意識をもたずに論を進めていくと、往々にして議論がまとまらず、良い論文にならないことが多い。したがって、この『論文作成ガイドブック』では、帰納法的方法論に依拠しつつも、理論的な前提や仮説といったことを充分意識することで、論文としての完成度を高めることを目指している。

アウトラインについて

テーマ設定、問題設定、前提と仮説が明らかになってきたところで、今度は論文全体の

骨組みを作る段階に入る。これがアウトラインである。このアウトラインがしっかりしていないと、論文としての一貫性、一体性が失われてしまう。それだけに、ここでは論文完成までを見通してアウトラインを設定する必要がある。また、**アウトラインをいい加減に作り、実際に論文を執筆していく中でだんだんとアウトラインから外れていくことは許されないことである。**アウトラインどおりに論文が進まないときは、アウトラインまで戻って書き直すべきである。

アウトラインは通常、見出しの箇条書きを並べるように書くことが多いが、これでは書き進めていくうちに思わぬ方向に議論が進んでいく可能性が高い。**アウトラインはあくまでも議論の骨子を明らかにすべきものであるため、必ず文章化して書くこと。**文章化することで、問題設定・問題意識から仮説、本論における論点の整理、結論に至るまでの流れを一貫して捉えることが出来る。**アウトラインは箇条書きではなく、論文の要約 (abstract) として書くこと。**

このアウトラインを作るにあたっての注意点は以下の通り：

- 序論での問題設定を明確に文章化すること。**なぜこのテーマを扱い、このテーマから何を導き出すことが出来るのか、ということ**を明らかにし、この論文で問い掛けられるべき質問は何であり、どのようにそれに答えようとしているのかを明らかにする。出来れば実際に論文で使えるような文章にしておくこと。
- **問題設定に対応した結論を書くこと。**問題提起で明らかにした疑問に対する答えになっているかを確認する。
- 本論部分は、まず論点をきちんと洗い出し、問題設定で示した疑問に対し、どのようなポイントを論じれば結論が導き出せるか、ということ¹を明らかにすること。この際、**あらゆる論点はすべて結論に必要な限りで書く。**結論に結びつかない論述は紙の無駄。特に「歴史的経緯」や「歴史的背景」を論じる章を設ける学生が多いが、結論に直結しないものであれば、書く必要は無い。
- **すでにバックグラウンドリーディングのところ**で説明したが、**論文は調べたことをすべて書くことが目的ではない。**論文は一つの作品として、無駄を排し、余計なものは付加しない。あくまでも自分の問題設定に対し、答えを出していく論理的な展開を書いていくものである。そのためにも論点の整理と構成が重要になる。
- それぞれの論点に基づいて、章や節を設定する。それぞれの章や節では小さな問題設定を行い、章や節の終わりにまとめる形でその問題に対する答えを示す。論文の最終的な結論はそれぞれの章での答えをつなぎ合わせれば結論になるというのが望ましい。

リサーチについて

アウトラインの作成が終わると、今度は本格的なリサーチに入る。すでにバックグラウンドリーディングで、ある程度の資料に目星をつけているはずではあるが、ここでは文献、資料の精読作業に入る。ここから先はテーマによっても、また人によって様々なやり方が

あるので、リサーチ手法に関しては試行錯誤しながら自分のスタイルを身に付けていくのが望ましいだろう。いくつか注意点だけ述べておく：

- 常に自分の論文を念頭に置きながらリサーチを進めること。資料や文献に書いてあることを鵜呑みにするのではなく、自分の議論に役立つかどうかを考えながら読み進めること。
- 常にノート（メモ）をとること。どの文献のどこに必要なことが書いてあったかがすぐわかるようにしておくこと、論文を執筆していく過程が楽になる。インデックスカードを使って、メモを論点ごとに整理すると論文を書くときも楽になる。同様に、自分が使った文献のリストを作っておくと参考文献（reference, bibliography）を作るのが楽になる。
- 文献を読んでいく際は脚注や出典に注意すること。そこからより自分の論文に関連する資料を探し出すことが出来る可能性が高い。

第一稿執筆について

アウトラインの作成が終わり、リサーチが済んで、自分の手元に大量のメモが揃ったところで、第一稿の執筆に入る。第一稿は論文全体の 70-80%が出来上がっていればよいが、今後、様々な変更もありうるので、完全な形で書く必要は無い。

第一稿で重要なポイントは問題設定と結論がしっかりかけているかどうか、という点である。本論部分は中途半端なままでも良い。第一稿を終えて、さらにリサーチを進めることで本論はいくらでも膨らんでいくが、問題設定と結論は第一稿から大きく変わるものではない（結論は本論の進み具合によって、また新たなリサーチによる発見によって変わらうが）。いずれにしても、論文として、一通りの形になっていることが重要である。

第一稿を書き進めていく上での注意点は以下の通り：

- **資料を見ながら執筆しない。** 文献や資料を見ながら書いていると、畢竟、その文献の議論の流れに乗せられてしまい、自分の意見か他人の意見かわからなくなる。**資料を見るのは、第一稿を一通り書き終えてからにすべし。** まずは自分の言葉と自分のメモだけで議論を組み立て、自分の意見、自分の分析を中核に持ってくること。資料を引用する場合以外は、他の文献に書かれていることをそのまま移すのは plagiarism（パクリ）として厳重な罰の対象となる。
- **自分の意見と他人の意見をきちんと区別すること。** 他の資料に書かれていたことは「誰々によれば」とか「誰々の議論では」といった言葉をはさむことで自分の意見と違うということを明らかにする。そのためにも上記で述べたように、自分の意見だけで議論の骨子を作り上げ、そこに他の文献を継ぎ足していくという作業をするべきである。
- **議論の流れ、論文全体の統一性を大事にすること。** それぞれの章や節が論文全体の中でどのような位置付けにあるのか、なぜこの章でこの問題を取り扱うのか、というこ

とを常に明示し、前の章・節との関係や論文全体の問題設定との関係を明らかにすること。こうした流れがしっかりしていないと、読み手に論文の意図が伝わらない。

- **注をつけながら執筆を進めること。**後から注をつけようと思っても、どこからどこまでが自分の意見かわからなくなり、結局その辺が曖昧になることが多い。第一稿からきちんと注をつけながら論稿を進めること。

第二稿以降について

第二稿以降は第一稿につけられたコメントを参考にし、よりよい論文になるような工夫を出来るだけ進めていく。指摘された点を直すだけでなく、さらに論文を膨らませ、より豊かな議論が出来るように努めること。後は締め切りに間に合うよう、頑張るだけ。

第二部に続く...